Chuo University Sagamihara

相模原白門会 会報

―相模原支部―　第２号

発行所　中央大学学員会相模原白門会
（相模原支部）事務局
中澤社会保険労務士事務所内
〒252-0239
神奈川県相模原市中央区中央3-7-1
TEL 042-860-2622
印刷所　株式會社　日相印刷

ご挨拶

相模原白門会
（相模原支部）会長
佐々木 勝洋
相模女子大学 専務理事
昭和四十四年卒

相模原白門会（相模原支部）は、ようやく創立三周年を迎えます。この間に、会員数も百五十人近くに増え、さまざまな行事が活発に行われるようになりました。創立当初からの相模原白門会の願い、それは「若い人たちが中心となって活動する同窓会」にしたいということです。若い人たちにとって同窓会活動にかかわることが、若い人たちにとってのメリットになってほしいという思いがあるからです。

中央大学の卒業生という絆で結ばれたさまざまな世代のメンバーが交わり、自然の形で先輩が後輩を支援し、先輩も若い世代の息吹を感じる、世代間の活動の中で、相模原白門会が存在する意義が生まれ、真のPeer Supportが実現できるのではないかと考えています。そしてまた、地域の中での相模原白門会が、地域文化を高める役割を担って行けるようになってほしいと思います。

この度お手元にお届けする相模原白門会の会報やホームページなどを通じて、広く皆さんのお知恵をいただきながら、魅力ある相模原白門会の実現に努めてまいります。

平成25年3月10日
相模原白門会設立総会式（上）と設立懇親会（右）にて

【平成二十七年新年会に参加して】
とても楽しいひと時をありがとうございます

小川 桂子
平成三年卒

平成二十七年二月七日は中央大学相模原白門会（相模原支部）の新年会でした。同日に行われた在学生による「落語会」では、落語部の在学生男女二人がきわめて質の高いパフォーマンスで私達を楽しませてくれました。女性の方の芸名が、高校時代のあだ名で「ふられ亭色苦（ショック）」だと聞いた時には、落語に関しては素人の私も思わず吹き出してしまいました。噺はとても面白かったのですが、何故か二人は終わった後納得がいかない表情をしており、そんな真剣なところが、とても愛らしく思えました。そして、後輩達が好きなことに打ち込んでいる姿に心を動かされました。二人の一途なところを私も見習いたいと思います。

落語の後、新年会のお食事は洋食でした。おいしかったせいもあってか、私が先輩をはじめみなさまとの話に夢中になっている間に、あっという間に無くなってしまいました。少ししか食べられず残念でした(笑)。最後の校歌斉唱では、私はところどころ歌詞を忘れてしまっていたのですが、他の多くの方はよく覚えており、驚きました。この次は歌えるようになって参加したいと思います。こうして、歴代の卒業生の方々との楽しい交流の時間もあっという間に過ぎていきました。

新年会に参加するのは今回で二回目となります。ここでは、話しきれないくらいに、相模原白門会に入会して、歴代の諸先輩方からたくさんのサポートをいただいております。これから、もっと多くの会員の皆様に集まっていただいて、この素晴らしい相模原白門会を一緒に守っていきたいと思います。

新年会落語会風景

平成27年2月7日
相模原白門会新年会パーティー会会場にて

恒例行事①

毎年大好評！ 相模原白門会バーベキューパーティー

バーベキューのススメ

富岡克昭
昭和四三年卒

木立の上を渡る涼風に「中央大学相模原白門会（相模原支部）」白地に赤文字ののぼりがゆれている。ここは相模湖プレジャーフォレストのバーベキュー場だ。カマドの煙と焼肉や豚汁、カレーの食欲をそそるにおいが鼻をくすぐる。おいしい料理の最中、出来上がり次第、口に運んでいる。自然の中で仲間とその家族が恒例のバーベキューを楽しんでいる。家族参加も増えている。みんな積極的に参加し今回は約四十人と子供たちとなった。

食材を調達等世話をする人、料理をする人、飲む人、食べる人、遊びに夢中になる子供達、みんな笑顔だ。毎年八月の行事として実行している。子供達にとっては夏休み最終の楽しみとなっているらしい。家族や新しい仲間も呼んで毎年楽しむぞ！

バーベキューレポート

木藤良子
昭和四十四年卒

本年度の役員の端に名前を連ねることになったが、何をお手伝いしたらいいかわからずに　恐る恐る行事参加デビュー。

まず頭に浮かんだのはアルコールを沢山飲む、ということでチャッカリと送迎ワゴン車を利用して相模湖ピクニックランド着。

調達された新鮮な野菜や肉を切っているうちに強張っていた口も体も自然に動いていく。いつしか隣には可愛い女の子（会員の井上さんのお嬢さん）とお母様がいて、一緒に楽しく会話をしながらの調理。焼きあがった肉や野菜はジャンジャンなくなるし、氷水を入れた青いポリバケツの中のビールもドンドン減っていく気持ちよい光景です。

『相模原白門会』の幟を見て隣のグループから「中大卒業生ですか？僕もそうです」と話しかけられたり、あちらこちらで話の輪が広がっていく。後ろ側のコンロでは若い女性のグループが一足遅れでバーベキューを始めて、賑やかさは更に増していく。

仕上げの焼きそばを作るころにはもう肉はなく、野菜だけのヘルシー焼きそばになってしまう。豚汁は火力が弱くなかなか仕上がらない。未完成の豚汁はでれでれ顔と共に後ろの女性グループにあげることになる。

帰りの車の中で、次回はもっと肉を多く用意しなくては、豚汁は早めに仕込まねば、と一人で反省点をつぶやいていた。

自然の中では心は開かれ、体はリラックスして、親睦会として最高でした。

次回は会員の皆様多数の参加を期待しています。楽しい会であることは保証します。

恒例行事②

同門の想いを一つに！「駅伝（予選会・本選）」

大学駅伝予選会応援

箱根駅伝応援

第九一回箱根駅伝 予選会の観戦記

平田 秀昭
昭和四十七年卒

平成二六年一〇月一八日（土）、立川昭和記念公園で行われた第九一回箱根駅伝予選会に中央大学の本大会出場を心から願い、現場で応援したく参加した。

私が箱根駅伝に興味を持ったのは、小学校五年生頃（昭和三五年）かと記憶している。

当時はまだテレビ中継はなく、ＮＨＫのラジオ放送による実況中継であった。大手町から箱根までの地理的情景も頭に浮かばず、大学生がひたすら長い距離を走っているという程度の知識しかなかった。ただ、父親がラジオに耳を傾け中央大学の順位を気にしていたことを覚えている。今思えば、母校の走りがすごく気になる今の自分と同じだったのだ。その頃の中央大学は、箱根駅伝史上に燦然と輝く六連覇を達成した最強の時代であった。以来、正月といえば箱根駅伝、駅伝といえば中央大学のイメージが私の頭の中にしっかりと刻まれたのである。

近年の箱根駅伝における母校の成績は低迷の一途を辿り、二年連続の予選会出場となって、居ても立ってもいられず応援に駆け付けた次第である。

四八校五六一選手がスタートしてからの約一時間は人山の隙間から、Ｃのゼッケンが通り過ぎるのを探すが先頭集団には見られず、また、各校一〇人の合計タイムで予選突破（一〇校）を争うが、途中経過で何位になっているのかも全く分からないままで不安は募るばかりであった。

二〇kmを走り終えた各校の選手達と結果発表会場のテント付近で交錯する。どの選手も全力で走り切った清々しい顔であり、汗が陽に輝いて眩しく見えた。

そして結果発表。「第七位は、中央大学です」のアナウンスに思わず「オーッ」、「ヤッター」の叫び声、破顔一笑で各支部の白門会の旗が一つに揺れた。八六年連続八九回目の本大会出場（共に、不滅の大会記録更新）が決定した瞬間は、まさに至福の時でもあった。

箱根駅伝応援から 元気を貰い今年もスタート

安藤 和次郎
昭和三十七年卒

定年後十六年前からテレビ応援から茅ヶ崎海岸の海水浴場前付近で毎年応援している。暮れの昨年の十二月六日(土)中澤洋氏から応援の下見で誘われ同行した。

応援場所は互いに知っていたので、沿道からトイレの近い所を推薦した。特に応援後の新年会の予定の場所を五箇所下見して、毎年立ち寄る駅ビルで生ビール・焼酎で成功を誓い乾杯、当日の応援コース、場所等を検討した。

当日の行動／日時一月二日（金）九時四五分／集合場所ＪＲ茅ヶ崎駅改札前／応援場所　サザン通りを通り神社前お神酒で必勝を祈念し海水浴場前／応援後は高砂緑地の公園を散策した後、新年会の場所「天の魚」／会場　茅ヶ崎駅改札東側三分余の所

以上を提案し事務局で採用され実施したものです。

応援状況　一時間前に到着し応援場所を確保、通過三〇分前は沿道に人垣が幾重にもなった。

いつもの早稲田や農大、日大など多くの旗がはためく中を初めて母校が名乗りを揚げ感動した。

先頭集団が近くなると、上空を撮影のヘリコプターの爆音が聞こえ、パトカーが通過、白バイの先導で選手が見えると一斉に声援が高くなり、母校の白地に赤のＣのマークの選手が通過した時には大声で気合を込め応援した、毎年のことだが胸が高まり興奮するものだ。

厳しい予選を勝ち抜き選ばれた勇士を見ると理屈なしに可能な限り現場で応援しなければ到底味わえないことです。

結果は往路一〇位でシード直前最終一〇区で最後尾となったが、しかしアンカーが膝の故障にもよく耐えて頑張りタスキをつないだ。このことは思い切り称賛、感謝した、来年は多くが臨場感を体験して貰いたいと願っている。そして、必ずや来年の出場権を獲得して貰いたいと念じている。

新年会「天の魚」では篠原事務局長他会員一二名余が母校の健闘と互いの健康を念じ乾杯した、大変盛り上がり、来年の母校の発展を願いお開きとなった。

激動の時代

梅津久光
昭和四十三年卒

学生運動が激しくなった四十三年度に卒業しました。またも激動の時代です。

私が生まれたときも日本が戦争に敗れた大変な時代でした。

子供の時は食べ物が少なく、現在のように恵まれていませんでした。

しかし日本全体が貧しい時代なのでそんなに貧富の差を感じなかった気がします。

それから日本の発展と共に生きてきた人生だと思っています。

さて、相模原白門会（相模原支部）のことですが十年前から相模原に白門会が無いのに気付き設立の機会を伺っていましたが、発起人皆様の協力により平成二十五年三月に設立されました。

相模原白門会（相模原支部）の目的は「①会員相互の親睦　②母校の興隆に寄与する　③地域に奉仕する」です。

今後はわが相模原白門会（相模原支部）会計監事の酒井正三郎先生が学長になられましたので、ますます会員を増強し、楽しい会にしたいと思っています。

一時の青春

松田清治
平成二十二年卒

齢七十二を数える。古希を過ぎた高齢者が”青春“を語るのは大いに場違いな話である。

しかしながら、サミエル・ウルマンは、詩集で青春について「YOUTH is not a time of life - it is a state of mind; (青春とは、人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。(訳:岡田春夫)」と書いている。この文言を思い起こせば、高齢者でも何となくその気にさせられ、元気も出ようと言うものである。

そうした激励を得て、老人を青春時代に引き戻してくれる場所がある。

大学野球のメッカ「神宮球場」である。試合が始まれば、学生服に学帽を被った応援団員が団旗を掲げ、団長が校歌斉唱を指揮し、応援歌を歌い、ピンチになれば、必死に選手を鼓舞する。得点すれば、応援席のOBが肩を組み喜びを表し、大いに盛り上がる。こうした光景は、学生・青春時代を思い起こし、歳を忘れさせ、青春に戻れる「一瞬」である。なかなかこうした気分に浸れるのは、神宮球場以外にないと思っている。神宮球場は、選手・応援団・OBの青春が詰まっている所でもある。それ故、暫くの間、私は、神宮通いが続きそうである。願わくは、我が青春への思いが途切れぬ間に母校中大が東都大学野球で優勝することを切に祈っている。

相模原から**世代**を**越**えて、
お**互**いに**親睦**をはかり、**母校**を**盛上**げ、
地域を**活性**させましょう！

新規会員募集

※是非、ご紹介もお願いします。

入会は、①**公式ホームページ**または② **FAX** にてお申込ください。

①公式ホームページ

http://www.gakuinkai.com/sagamiharahakumon/ にアクセス

もしくは 相模原白門会 で検索

②FAX

お手数ですが、一度、042-860-2622 まで お電話で お問合せください。

主な活動ご紹介

Chuo University Sagamihara

母校応援

ホームカミングデイ
（予選会10月）

親睦交流

総　会
（６月）

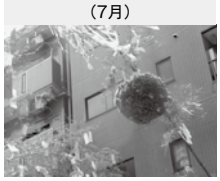
ゴルフコンペ
（７月・11月）

駅伝応援
（予選会10月・本選１月）

バーベキューパーティー
（８月）

新　年　会
（１月または２月）

地域活性

相模原市民さくらまつり
（4月または5月）

橋本七夕まつり
（7月）